

日本で英語で授業を教えることに関する一考察： 米国式教授法の課題と課題への対処法

伊藤 大将^{註1}

要 旨

大学の国際化の一端として英語で授業を教えることが推進されるなか、教員に対する英語研修といったファカルティ・ディベロップメントは盛んに行われ報告されている。しかし、教員の英語能力に関するものが多く、アクティブラーニングを鑑み、効果的に授業を教える方法について論じたものはまだ少ない。

本稿は、英語能力や文化的背景が異なる留学生や日本人学生が混ざる教室で、英語で授業を行った際に直面した課題とその課題に対する対応について述べ、今後どのような対処が必要かを検討し提案する。筆者が2015年秋学期に英語で留学生と日本人学生を対象に教えた授業での経験を基に、授業前のリーディング、授業中の講義とディスカッション、評価方法の3点について考察し、日本人学生の英語能力に合わせた授業作りについても考えを示した。

I. はじめに

文部科学省は「留学生30万人計画」を掲げ、2014年時点で18万5千人弱である留学生数を、2020年迄に30万人に増やすことを目標としている。近年、日本の大学は急速に「国際化」を進めており、金沢大学もその例外ではない。金沢大学はスーパーグローバル大学創生支援タイプB（グローバル化牽引型）に採択され、学内の国際化に取り組んでいる。その国際化の一つの特徴が「英語で授業を教えること」である。

日本では英語で講義を行っている授業数は未だ少なく（多田 2003）、それが留学生が日本に来る「阻害要因」となっている（太田 2011）。英語で学べる授業数が少ないと、外国人学生が日本の大学で学習するためには日本語の能力が必須となる。留学生は、日本語取得のためだけに多大な時間と費用を費やさなければならぬし、英語の習得と比べると、国際社会の中で日本語を話せることに対する見返りが小さいため、日本には行かないとなってしまうのである（太田 2011）。

日本の大学の多くは、日本人を対象にするものも含め、英語で教える授業の割合を

増やそうとしているが、その障壁となっているのが、英語で授業を行う教員の確保である(多田 2003)。花見(2011, 2012)は教員の英語力と自信の欠如が課題となり、英語で教えることがためらわれている現状を指摘している。昨今大学はFD(ファカルティ・ディベロップメント)を積極的に開催したり、外国人教員や外国で学位を取得した日本人を積極的に採用することで、英語で教えられる教員の増加に取り組んでいる。数年後には英語で教える授業の割合は増えることが予想されるが、これまでほとんど議論されていないのが、「授業の組み立て方」についてである。たとえ教員が英語ができて、効果的な学習を促す授業ができるとは限らない。

本稿では、2015年秋学期に筆者が英語で教えた授業2つの中で生じた課題について記し、その課題に対しどう取り組んでいったらいいか、筆者の考えを述べる。主に生じた課題は、留学生によって英語能力にばらつきがあり、授業の構成の変更を余儀なくされたことと、文化的な背景の違いのため学びのスタイルが異なり、米国式の教え方が上手く機能しなかったことである。

II. 筆者の背景

本稿を読み進める前に、筆者の背景を理解しておいてもらえると書いている内容がわかりやすくなると思う。筆者は社会学を専攻し、米国でPh. D.を取得した。大学院生の時に授業の一つとして「Teaching Sociology」という授業を取り、授業前の準備(教科書の選び方やシラバスの作り方)、授業での講義やディスカッションの仕方、評価方法(試験やレポート)等について学習し、米国式の授業の教え方を勉強した。この授業の目的は、大学院生が教える授業の質の確保、学部内の同じレベルの授業のアサインメントの量や難易度を揃えること、卒業後に教員になることを見越し授業準備を大学院生のうちからしておくこと等が挙げられる。この授業が終わってすぐの夏に「Introduction to Sociology」を学部生に教えた。Teaching Sociology 担当の先生は授業見学と授業を受講している学生との話し合いを各1度行い、筆者の教え方の長所と短所を指摘してくれた。その後、年に一度社会学の教授が授業を見学し、改善点を指摘してくれた。筆者は2010年から2015年にかけて「Introduction to Sociology」の他、「Social Problems」や「Gender and Society」、他学部から出された「Japanese Language and Society」を教えた。

Ⅲ. 授業概要と受講学生：「ジェンダーと社会」と「日本語と社会」

金沢大学では「ジェンダーと社会」(Gender and Society)と「日本語と社会」(Japanese Language and Society)の2つの授業を2015年秋に教え、本稿を書いている時点で学期末に差し掛かっている。どちらの授業も主に留学生対象の授業であるが、日本人学生にも開講されている。少なくとも1度米国で教えたことがある授業であり、大まかな進め方や授業で扱うトピックはほぼ米国で使ったものと同じである。

ただし、日本で教えるにあたり2点変更を加えたところがある。授業で取り扱う論文を日本に関するものに変え、授業のコマ数の関係でリーディングやアサインメントの量を変更した。留学生は日本について勉強する目的で留学しているため、米国に関する論文を多く含んでいた「ジェンダーと社会」の授業では、日本に関する論文に入れ替えた。一方、「日本語と社会」は米国人学生でも日本に興味のある学生が受講していたため、米国で使った教科書をそのままこちらでも採用し、トピックにもほとんど変更は加えなかった。授業前に読んできてもらう論文に関しては、以前使ってあまりしっくりこなかったものを新しいものに取り換えるだけにした。米国では週2時間30分の授業を14週に渡って行ったが、金沢大学では週1時間30分の授業を16週間（試験日も含めて）と授業時間が減るので、それに合わせてリーディングやアサインメントの量、1つのトピックに費やす時間等を減らした。表1に授業の予定を提示した。

表1：授業予定

	ジェンダーと社会	日本語と社会
Class 1	The Sociological Imagination	The Sociological Imagination
Class 2	Sex and Gender	In-group/Out-group
Class 3	Masculinities/Femininities	In-group/Out-group
Class 4	Intersectionality	Learning to be Japanese
Class 5	Heteronormativity	Learning to be Adolescent
Class 6	Midterm	Lost Harmony
Class 7	Early Socialization	Seniority
Class 8	Analyzing Gender as a Social Structure	Male-Female Relationships
Class 9	Families	Families
Class 10	Media	Fathers and Mothers
Class 11	Sexualities	Work
Class 12	Media	Global Culture
Class 13	Work	Popular Culture
Class 14	Sports	Japanese Way of Thinking
Class 15	Social Change	Religion
Class 16	Final Paper Presentations	Final Paper Presentations

「ジェンダーと社会」を受講した学生は9人で、出身国はタイ4名、フランス、アイランド、マレーシア、オランダ、スペインが各1名だった。「日本語と社会」は16人受講し、出身国の内訳はフランス、ドイツ、タイ、ベトナムが2名ずつ、オーストラリア、インドネシア、日本、マレーシア、ポーランド、ルーマニア、韓国、スペインが各1名ずつだった。

IV. 授業前のリーディングアサインメント

大学によって多少の違いはあるものの、米国では学生は毎週2～3時間程度を授業の準備に割くことが期待されている。そのため米国で教えていた時には、筆者は毎週だいたい40～80ページ位、20ページ位の論文を3～4本（Gender and Society は75分の授業を週2回していたので、1回の授業のために20～40ページ、論文1～2本）、読んでくるように指示を出していた。ここに挙げた授業では米国の時と同様に1回の授業（90分）に20～40ページのリーディングを課したが、授業中に何回か聞いた結果と教えている最中に受けた印象からすると、事前に論文を読んでくる学生は2割にも満たなかったように思う。米国の学生でも読んでこない学生は多くいるが、日本で1つ気付いたのは読んでこない学生の多くは英語能力が比較的低い学生であることだった。また、英語能力がそこそこある学生でも課された論文の1本は読んであるが、2本目は読んでいないことや、長い論文だと15～20ページで止まってしまっていることがあった。これは、授業中に英語で説明されることを聞いて理解することはできるが、論文を読んで理解するまでの英語力を備えていない留学生がいることを示唆している。また、米国ではシラバスに授業の予定と読んでこななければいけない論文が細かく指示され、その計画通りに授業を進めていくので、授業前にシラバスの予定表を見て準備してくることは学生の責任であるが、そういったシステムで勉強してきていない学生は、何を事前にしてこななければいけないのかが明確でなかったとも言えるだろう。これは、筆者が「次の授業ではここを読んできてください。」と指示を出した時には、より多くの学生が準備をしてきていたことから得た印象である。

Svinicki and McKeachie (2011) は学生がリーディングをしてこない理由は、してきた時としてこなかった時で、どのような違いがあるのかがはっきりしないからだと言っている。そして学生にリーディングをさせるように働きかける方法として、授業で読んだ論文についての感想を書かせたり、小テストをしたりといった具体的な方法を提示している（Svinicki and McKeachie 2011）。本授業では、感想文や小テストを行うことを宣言してプレッシャーを与えて読ませるのではなく、リーディングの量を減ら

すことで対応した。それは、学生が怠けて読んでこないのではなく、課された量を「読めない」のだと判断したためである。2つリーディングがあるときは、インタビュー調査をしていて、被験者が話したことを引用として多く含む読みやすいものや、読む前から委縮してしまわないようページ数の少ない論文を選び、授業の最後でどれを読んできてほしいか明確な指示を出した。これにより読んでくる学生は少しは増えたようだが、それでも読んでこない（あるいは読めない）学生はいた。読む量を減らすだけでなく、リーディングに関する質問を事前に渡すなどし、論文の要点だけでも捉えてもらう工夫が必要だと考える。

V. 授業中の活動

米国で教えられた方法は、一方的に講義をするのはできるだけ避け、学生に質問をしながら講義を進める interactive lecture を用いることと、ディスカッションをして理解を深めることであった。また、その時々ニュースで取り上げられている事柄や、写真や映画の一部分といった視覚資料を使い、学生に刺激を与える手法も習った。米国ではおおむね上手く行っていたと思うが、日本で同様の方法で授業を教えた結果、上手く行かなかったものもいくつかあった。その原因は文化的背景の違いと英語の能力の差にある。

授業中、最も効果的だったのは interactive lecture で映像を使う手法であった。例えば、doing gender というジェンダーはすることであるという概念を説明した時には、男性俳優が女装しているビデオクリップを使い、どういった点でジェンダーは静的なものではなく、人が行う動的なものであるといえるのかを学生に質問した。こういう問いに対しては学生から声がよく上がった。

逆に、苦勞をしたのが例やトピックの選び方、時事ニュースの使用、ディスカッションである。筆者の背景の影響で、概念を説明するのに使う例やディスカッションのトピックは米国よりのものが多かった。具体的には、米国人が好きなスポーツや、米国人なら誰でも知っているであろう芸能人、テレビ番組、映画なのだが、それらを学生が知らないことがあった。学生がわからなければ例として成り立たないので、代替りの例を考えなければならないが、全員とは言わないまでもほとんどの留学生がある程度の知識を持っている例を見つけるのは容易ではなかった。結果、例を説明することになり、概念の説明がややこしいものになってしまうことがあった。どんな簡単な例でも、できれば映像、少なくとも写真を用意し、学生が例に関する知識を持ち合わせていないことを前提に授業準備をする必要がある。

英語で書かれた日本や外国の時事ニュースを印刷して持って行き、一人ずつ読ませてディスカッションをしようとしたが、2ページほどのニュースを読むのに、辞書を何度も引き、時間がかかる学生がいた。限られた時間内でカバーしなければならない題材があるため、そういった学生が読んでいる途中でも進めなければならないことがあった。一人で読む代わりに、グループにして記事の要旨をまとめる作業も試みたが、読めない学生がおいてきぼりになったり、できる学生に頼りきってグループワークに参加しなかったりということが起こり、課題の解決には至らなかった。ニュースの記事を印刷して読ませるのではなく、ニュース自体の映像を見せると比較的スムーズに進んだ。

米国の学生は意見を言うことに慣れていてだけでなく、意見を言う機会が少ない授業を嫌うことが多いが、ディスカッションという形の授業に慣れていない留学生も多い。筆者も米国に行つてすぐには、ディスカッション形式の授業には馴染めず、なかなか意見が言えなかった。同様に、特にアジア出身の学生は、一般的に英語力が低いこともあるだろうが、ディスカッションに飛び込んでくることはあまりしなかった。手を挙げて当てられるまで待つて発言をする学生はいたが、全くディスカッションに参加しない学生も多くいた。アジア出身の学生と比べると、ヨーロッパ出身の学生は意見を言ったが、それでも米国の学生ほどではなかった。ディスカッション自体があまり上手く行かなかつたと結論付けられるだろう。

学期も終わりに近づいたころ、金沢大学に短期留学で来ていた米国人の学生9人が、「ジェンダーと社会」の授業にゲストとして参加したことがあった。その日の授業は、日本人女性の不倫についての論文を読みディスカッションを行うことと、筆者が援助交際の論文を説明することで、日本でセクシュアリティを学ぶのが目的だった。質問をするたび、米国人学生は積極的に自分の意見を言い、他の学生は最初は圧倒されているようだったが、それが刺激になったのか米国以外の学生もディスカッションに参加し、活発な意見交換がなされた。

その次の授業では、米国と日本の歌手のミュージッククリップを使い、ジェンダーがメディアの中でどう表現されているかを勉強したが、女性のエンパワーメントにつながっているか、あるいは女性を性の対象物として扱っているかで熱の入った議論になった。トピックがディスカッションをしやすいものだった点も大いに影響したと思うが、米国人学生が参加したことでディスカッションの仕方がわかり、有用性に気付いたりできたのではないかと思う。

この授業の後、タイの学生が2人、筆者に個人的に話に来た。ディスカッションに全く参加できなかったが、それが成績に影響するかが心配であったとのことだった。発言が多くても社会的でないものや論文の要旨とはずれていることを延々と話す

生もいるし、全く発言しなくても意見を書かせるのととてもしっかりしたものを書いてくる学生もあり、ディスカッションに参加しないからといって授業への参加度が低いとは言い難い（Svinicki and McKeachie 2011）。ディスカッションへの不参加が成績に影響しないことを説明し、意見があれば是非発言してほしいこと、ディスカッションに飛び込めないのであれば手を挙げてくれれば当てること、英語で言えなければ日本語で言ってもいいことを伝えた。しかし、この後の授業でもディスカッションに参加はしてこなかった。

授業内でディスカッションをすることが有益であるかどうか議論はあると思うが、特に社会学のような人間の行動を扱い、現在に焦点を当てる学問分野では学びにおいて大事な要素である。加えて、アクティブ・ラーニングが推奨され、英語で発信できる学生を育成していくことが国際化の1つの目標として掲げられている。日本人、留学生に関わらず、日本の大学で学んだ学生全員が質疑応答に臨機応変に対応したり、仕事の場で交渉をしたりするには、ディスカッションのような練習が必要であろう。授業に来て突然与えられたトピックについて意見を言えといわれても、ディスカッションに慣れていない学生や英語がたつたない学生は戸惑うかもしれない。ディスカッションリーダーを決めておいて、学生にディスカッションを先導させる役割をさせたり、事前にどんなディスカッションをするか伝え、それについて意見を準備してきてもらい、それを一人ずつ発表させる等の工夫が必要だと考える。

VI. 評価方法

教員はそれぞれの授業の到達目標を設定し、シラバスに明記している。授業中に行うことやアサインメントは学生がその授業の目標にたどり着く手助けをするものでなくてはならず、評価方法は学生が目標に到達できたかを測れるものでなくてはならない。例えば、「ジェンダーと社会」と「日本語と社会」に共通する到達目標は、critical thinking skills through writing（批判的思考能力を文章を通して示すこと）である。この達成を助けるため、授業中にはexploratory writing（思いついたことを書いていく非公式なライティング）をしたり、ライティングの要素はないがディスカッションを行ったりしており、最後にレポートを使って到達度の評価をしている。それぞれの授業の目標と評価方法の詳しい内訳は表2に記した。

「ジェンダーと社会」と「日本語と社会」の授業は米国で使った評価方法をほぼ踏襲している。現時点では学期が終わっていないためレポートの出来不出来はわからないが、ここまでの時点で、中間試験と調査研究で課題に直面した。

表 2：評価方法

ジェンダーと社会		日本語と社会	
In-class Writing	20%	In-class Writing	10%
Midterm Exam	30%	Take-home Exam	40%
Outline of the Final Paper	2%	Final Paper	40%
Final Paper	40%	Paper Presentation	10%
Paper Presentation	8%		
Total	100%	Total	100%

日本の大学で留学生を対象にした初めての授業ということもあり、授業開始前に学生の英語の能力が未知数であったことやどれくらい日本人学生が授業を取るに来るかわからなかったため、「ジェンダーの社会」の中間試験は授業中に、「日本語と社会」の中間試験は take-home exam（学生が家に持ち帰って答えを書いてくる試験）にした。どちらも記述式の試験である。授業の前半で学生の英語能力は理解できていたので、「ジェンダーと社会」の中間試験は難易度を落とし、問題数も減らした。にもかかわらず、試験を受けた8人全員が1時間30分ぎりぎりまで時間を使い、英語力の低い学生にいたっては、問題によっては空欄であったり、2～3行しか書いていないところもあった。採点を始めるとさらに問題が大きいことに気付いた。英語能力が低い学生の解答は何を説明しているのかわからず、問題の意図をきちんと理解できていたのかわからないものもあった。結果、英語能力の高い学生は満点近い点数を取り、英語能力の低い学生は50点取れないという事態に陥ってしまった。

中間試験の目的は、前半に説明したジェンダーの理論と概念がきちんと理解できているかを測るもので、英語の能力を測るものではない。英語能力が概念の理解度を測る妨げとなつては本来の中間試験の意図と異なるので、すべての学生に点数を失った問題を家に持ち帰ってやり直してもいいこと、授業中に解答を書いた学生は論文等を参照することができなかつたので、家に持ち帰った場合は獲得した点数の7割を与えることを説明して、希望する学生には同じ問題を持ち帰ってやらせた。授業中に行う試験は、英語能力が点数に影響してしまう可能性があるという点で、注意が必要である。

「日本語と社会」の take-home exam は、特に英語能力により点数に大きな差が出るということとはなかつた。「ジェンダーと社会」を受講している学生の日本語能力は比較的低かつたため全員が英語で答えを書いたが、「日本語と社会」の受講者には英語よりも日本語のほうが堪能な学生がいた。何度も言うが、試験の目的は授業で習った概念の理解度を測るものであるため、テストの答えは英語でも日本語でもいいと指示を出した。

その他、指示には授業で読んだ論文を明確に使うこと、クラスメートと試験について話してはいけないこと、ウェブサイトといったものを使ってはいけないことを明記した。また、概念を説明する時に日本に滞在して気付いたことを例として使うように指示を出したり、日本と他国（留学生は出身国を用いることが多かった）を比較したりするような問題を入れた。その結果、take-home examで見られるコピペの問題は無く、論文を読み直していることがわかるものが多かった。

Take-home exam をさせる上で難しいのが、問題の作り方である。学生は授業で使った論文を参照できるため、概念等を単に説明させるだけでは、とても簡単なものになってしまう。今回の take-home exam では、例を自分で考えたり、他国と比較させたりしたが、よりチャレンジ性の高い問題にするならば、「日本社会にとって最も大切な概念は何か論じよ。」のような、学生が自分で考え、授業で読んだ論文を使って自分の立場をサポートするような問題がいいだろう。Take-home exam の代替案として、授業時間よりも長く時間がかかってもいいこととする、辞書を持ち込み可にする、練習問題を事前に渡す（本当の試験で使う問題と似たもの）といった対応をとれば、英語能力ではなく授業の理解度が測れるだろう。

現在進行中の課題であるレポートでは、すでに学生から多くの相談を受けている。「ジェンダーと社会」のレポートは公共の場で人々のふるまい方や発言を観察し、そこでジェンダーがどう表現されているかを分析するのが当初の予定であった。しかし、日本語が話せない学生は日本人が話していることが理解できないし、留学生は行ける場所も限られているため、観察法を用いて調査をするのは無理だと判断した。代わりに何らかの調査をしてほしいと思ったが、雑誌やミュージックビデオ、映画といったメディアを分析するにしても、歌詞やキャプションを理解するために日本語能力は必須である。最終的には、ミニチュア版の実証的研究、文献レビュー、あるいは筆者が許可を出したテーマならいいと、選択肢を広げた。改訂前と改定後のレポートの指示を本稿末に別表1として提示した。一方、「日本語と社会」の授業は調査法やレポートのトピックには日本に関する以外には制限を加えなかったため、学生は比較的自由にトピックを選びレポート作成に励んでいる。

日本で勉強する留学生の興味は日本の伝統的な文化だったり、ポップカルチャーだったりするが、日本でレポートを書くだけの調査を行うとなると、ある程度の日本語能力が必要になってくる。短期留学生の中には日本語能力が低い学生もおり、満足に調査ができない学生は日本語能力のせいで成績が低くなってしまふかもしれない。日本語を勉強するのは本授業の目的とは異なるため、教員がレポートの指示を調整する必要がある。レポートをどう分析するか細かい指示を出す代わりに、レポートの大

まかな構造を教員が決めるのがいいのではないだろうか。例えば、学生が選んだトピックについて、「議論の要点を提示し、それを論理的な思考に基づいた論拠でサポートしなさい。」といった具合である (Elbow and Sorcinelli 2011)。サポートは学生が観察法を用いた調査から得た見地から得られるかもしれないし、学術的な論文から得られるかもしれない。こうすることで日本語能力の高い学生は調査を行ってもいいし、低い学生には文献を使うという選択肢が与えられる。

VII. 日本人学生

どちらの授業にも初日には日本人学生が3～5人出席していたが、2回目の授業では「ジェンダーと社会」の授業には1人もいなくなり、「日本語と社会」の授業には1人だけ残った。初日の授業で学生一人一人に自己紹介をさせたのだが、日本人学生の順番になったとき、「私、日本人ですけど…」と言うので「Please introduce yourself in English.」と英語で指示を出した。自己紹介ではほとんどの日本人学生が、「I did not know this class is held in English.」と言っていたので、授業が英語で行われていることが日本人向けの授業概要には記載されていなかったのだろう。どちらの授業でも初日には今後の授業の方向性を示すため、社会学の概念である The Sociological Imagination を interactive lecture を使って紹介した。1人を除く日本人学生がすべて授業をやめたことから推測するに、一般的に日本人学生は講義やアサインメントも含めすべて英語で行う授業を受けるだけの英語力がまだないのだろう。

「日本語と社会」の授業を取っている日本人学生は、多少リーディングに理解できないところがあったり、授業中の英語が聞き取れなかったりするようである。パワーポイントを使って講義を進めているが、パワーポイントに載せた英文のわからない単語を電子辞書を使って引いている様子も頻繁に見かけた。ただ扱うトピックが日本のことなので、それを補うだけの知識は持っているはずである。先にも述べたように、留学生の中には英語よりも日本語のほうが上手な学生もいるため、take-home exam やレポートは英語でも日本語でもいいことにしている。日本人学生と授業後に話をした時には、英語で書いてみることを勧めたが、take-home exam は日本語だった。

今回、どちらの授業でもシラバスは1つであり、受講している学生は差別なく同様の扱いを受けるべきである。よって、他の留学生には試験の答えを英語で書いても日本語で書いてもいいと言っておいて、日本人学生にだけ英語で書くような指示はしなかった。しかし、日本社会に関する知識をすでに持っている日本人には、特に勉強しなくても知っていることが多いので、日本人学生用に別のシラバスがあってもいいと

思う。授業の目的に英語で意見を言ったり書いたりできることを含め、授業ではディスカッションリーダーをしてもらったり、レポートを英語で書かせたりする。評価では、概念の理解に関する項目の割合を減らし、英語で話せる・書けることに関する評価を入れてもいいのではないだろうか。「日本語と社会」の授業に日本人学生が入って留学生と意見を交わすことは、日本人学生にとっても、留学生にとっても、授業を進めていく上でもとても有益なことであるから、日本人学生がプレッシャーを強く感じずに取れ、かつ学びのある授業構成が必要である。

VIII. おわりに：まとめと今後の展望

筆者が日本で英語を使って授業を教えたのは初めてであり、授業全体の構成、講義とディスカッション、評価等、あらゆる項目において米国で教えていたようにはいかないことに気付かされた。その主な原因の1つは受講学生の英語能力のばらつきである。米国では、留学生を含めすべての学生の英語能力が授業を取るのに十分であるかどうかは入学前に確認されるし、不十分な場合は学部の授業を受講する前にESL (English as a Second Language) の授業を取らなくてはならない。日本にいる留学生には英語能力にばらつきがあるし、国際化の一端として日本人学生にも英語で授業を教えることが進められている今、教員は異なる英語能力を持つ学生が同じ教室内にいることを想定しなくてはならない。その際に最も気を付けなければならないのは、授業の目的である。もし授業の目的が、筆者が教えた授業のように、日本のジェンダーについて理解を深めることや、日本社会を分析することであるならば、評価の際に英語能力が障害となるのは理想的ではない。あるトピックに関する理解度を測っているのか、英語能力を測っているのか不明確になるからである。英語能力によってシラバスを変え、授業の目的や評価法を変えるのは、案の1つである。受講学生の英語の能力を揃えるために、同じ授業を異なる英語のレベルで出すことも必要であろう。すべて英語で行う授業、リーディングの量を減らし、難しい単語の意味が簡単な英語で説明してあるプリントを配って行う授業、リーディングやアサインメントは英語だが講義は日本語とする授業等、様々な英語レベルの学生に対応した授業の提供が重要だと考える。

筆者がもう1つ気付いたことは、文化的な背景が異なる学生を教える難しさである。授業で扱う題材、教え方 (interactive lecture やディスカッション)、学生の大多数が知っている例等、文化によって大きな差があり、米国で使っていたものが効果的でないことがあった。様々な国からくる留学生が共通して興味のあるトピックや知っている例

を見つけることは容易ではない。授業の中核（「ジェンダーと社会」でいうなら前半部）ではない部分のトピックを選択肢を与えて学生に選ばせたり、視覚資料を使って例を出したり、教師の例の後に学生に例を出させたり、講義、ディスカッション、授業内でのグループワーク、ライティングを混ぜて教える等、出身国・文化の違う学生の個性をつぶしてしまうのではなく、その個性を生かした授業作りが教員の課題になる。

日本では、英語で授業を教える取り組みはまだ始まったばかりで、今後教員は英語でどう効果的に教えるかを継続して勉強していかなくてはならないだろう。英語で授業を教えている教員同士で意見交換をしたり、非英語圏の大学で英語で教えている授業を観察したりして、授業の質を高めていく活動を積極的に行うべきだと考える。

【注】

1 国際機構留学生センター

【参考文献】

- Elbow, Peter., and Mary Deane Sorcinelli, 2011, "Chapter 16 : Using High-Stakes and Low-Stakes Writing to Enhance Learning," Marilla Svinicki and Wilbert J. McKeachie eds., *McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers 13th Edition*, Belmont : Wadsworth Cengage Learning, 213-234.
- 花見楨子, 2011, 「三重大学における英語による授業の展開とファカルティ・ディベロップメント」『三重大学国際交流センター紀要』6 : 111-125.
- , 2012, 「ブレインストーミング「英語で授業する / しない」」『三重大学国際交流センター紀要』7 : 93-107.
- 太田浩, 2011, 「大学国際化の動向及び日本の現状と課題：東アジアとの比較から」『メディア教育研究』8 (1) : S 1-S12.
- Svinicki, Marilla., and Wilbert J. McKeachie, 2011, "Chapter 4 : Reading as Active Learning," Marilla Svinicki and Wilbert J. McKeachie eds., *McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers 13th Edition*, Belmont : Wadsworth Cengage Learning, 30-35.
- Svinicki, Marilla., and Wilbert J. McKeachie, 2011, "Chapter 5 : Facilitating Discussion : Posing Problems, Listening, Questioning," Marilla Svinicki and Wilbert J. McKeachie eds., *McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers 13th Edition*, Belmont : Wadsworth Cengage Learning, 36-54.
- 多田恵美, 2003, 「大学における英語による授業の可能性」『青森公立大学紀要』8(2) : 12-19.

別表 1

変更前の指示

Observation Paper (40%)

For this paper, you will observe the ways in which gender operates in an everyday life situation or a place. The purpose of this paper is for you to conduct mini empirical research and analyze gendered presentations. You should

- Pick a research site. Your research site could be a public place which you observe people's interactions, media such as the websites, magazines, movies, and books.
- Approach the site as if you are an alien. Assume nothing and write down *everything* you notice.
- Use your notes to write a paper. This is both a descriptive and analytic undertaking. Categorize and organize your observations, and then use course material to help you make sense of what kinds of gendered presentations appear. Focus on how people are producing and/or challenging the existing gender norms.
- Discuss how your research site reproduces or disrupts the sex/gender system. How do particular social and organizational institutions impact your findings? What are the structural implications of their actions and interactions? When you organize our paper, use **Messner's three levels of analysis : social interactions, structural context, and cultural symbol.**

Following your research, you will write about your results. Divide the paper into five major parts :

- a) **Introduction** : State your "argument." Summarize your research (e. g., research methods). (approximately 1 page)
- b) **Social Interactions** : What is a pattern you observed that you thought was particularly interesting/striking? How do gendered interactions differ depending on social characteristics? Give concrete examples of how gender is portrayed. (approximately 1.5-2 pages)
- c) **Structural Context** : Explain how organizations give a context that variously constrains and enables gendered interactions. (approximately 1.5-2 pages)
- d) **Cultural Symbol** : Discuss how cultural symbols reinforce and challenge gendered interactions. (approximately 1.5-2 pages)
- e) **Conclusion** : Conclude your paper by synthesizing the points you made. (approximately 0.5 pages)
- f) **Appendix** : Attach any additional information (e. g., pictures).

*** Make sure to draw on at least two articles from the assigned readings and/or academic sources (no Wikipedia). Also, read chapters from "Taking the Field." Your goal is to write a well-organized report of your findings and to present a thoughtful analysis. This paper should be approximately 6-7 pages, typewritten and submitted in class on Feb 10. All of your sources should be cited both within-text and in a works cited page at the end of your paper. **Review your academic dishonesty statement to remind yourself that plagiarism will not be tolerated.**

変更後の指示

Final Paper (Due on Feb 10) (40%)

For this paper, you will discuss the ways in which gender operates in Japan (and other countries). The purpose of this paper is for you to examine gendered presentations. You should

- Pick a research topic. Your research could be a mini empirical study, literature review, or any other format approved by the instructor. You may analyze a public site (e. g., gym) or the media, such as websites, magazines, movies, and books.
- Approach the topic as if you are an alien. Be open to different opinions/depictions and explore many aspects. Focus on how the existing gender norms are reinforced and challenged.
- Organize your paper before starting to write. You should have at least one argument you make. Provide concrete evidences to support your argument.
- Remember that this is a sociological class on gender. What are the structural implications of their actions and interactions? When you organize our paper, you may use Messner's three levels of analysis : social interactions, structural context, and cultural symbol.

Following your research, you will write your results. Divide the paper into three major parts :

- a) **Introduction** : State your "argument." Summarize your research (e. g. , research methods). (approximately 1 page)
- b) **Body** : Support your argument by providing evidences with concrete examples. You may use subheadings as appropriate. Organize well. (approximately 5 pages)
- c) **Conclusion** : Conclude your paper by synthesizing the points you made. (approximately 0.5 pages)
- f) **Appendix** : Attach any additional information (e. g., pictures).

*** You are strongly encouraged to use a few articles/class lectures or articles from academic sources (no Wikipedia). This paper should be approximately 6-7 pages, typewritten and submitted in class on Feb 10. All of your sources should be cited both within-text and in a works cited page at the end of your paper.

Review your academic dishonesty statement to remind yourself that plagiarism will not be tolerated.

Teaching a Class in English in Japan : Lessons from Putting an American Style of Teaching into Practice

Daisuke Ito

Abstract

As part of internationalization, Japanese universities encourage the faculty members to teach classes in English. To assist Japanese professors who are not confident in teaching English, the universities held faculty development activities. Although some authors reported these faculty development activities, their main focus was on English skills, and few addressed how to teach a class effectively with active learning in mind.

This paper describes the challenges the author faced while teaching two sociology courses, “Gender and Society” and “Japanese Language and Society,” to international and Japanese students in English in Japan. These challenges mostly came from having students of different English abilities in the same classroom and differences in cultural backgrounds. Specifically, the amount of reading assignments, lectures and discussions, and evaluations are the three areas of challenges focused in this paper. The author presents potential suggestions about how to deal with these challenges. As English only class alienates Japanese students, the ways to encourage them to take such a class are also discussed.